# 中上健次『枯木灘』

## ――秋幸の存在不安――

佐藤綾佳

### はじめに

『岬』（「文学界」、一九七五年十月）、『枯木灘』（「文芸」、一九七六年十月～七七年三月）、『地の果て　至上の時』（書き下ろし、新潮社、一九八三年）の三作は、主人公が秋幸という同一人物であることから「秋幸三部作」と呼ばれている。この三作は従来、秋幸と実父・浜村龍造との相克を描いたエディプス的なテーマを扱った作品だと言われてきた。だが、この三作は「秋幸三部作」という前提を排除して一作ずつ鑑賞すべきである。なぜなら、秋幸が試練を乗り越えて成長し、新たな試練に立ち向かっていく運動を〈反復〉しつつも、それぞれの作品毎に異なったテーマを持っているからだ。そして、この三作の前日譚である『鳳仙花』（「東京新聞」、一九七九年四月十五日～十月十六日）を加えると、秋幸が生まれて姿を消すまでの神話と考えられ、既に市川真人によって言われているように四作全体で「秋幸サーガ」[1]と呼ぶ必要がある。『岬』は私見によると、母や姉らの呪言によって自己を確立できない秋幸が、いくつもの禁忌を破ることで呪言から解き放たれ、自己を確立するというテーマの小説となる。[2]神話の主人公としての英雄が繰り返し試練を乗り越えて成長していくように、秋幸にも繰り返し試練が与えられ、それを乗り越えていく構造になっているのである。そして、『岬』において自己を確立した秋幸は、『枯木灘』において龍造との

対峙というさらなる試練に立ち向かわなくてはならなくなる。以上を承けて、本稿では『枯木灘』において浜村龍造や竹原一族の出現によって、より複雑となった血縁関係の中での秋幸の自己の位置づけにおける不安と、そこからの解放の背景をなす、物語終盤に描かれる秀雄殺害後の山中での秋幸のケガによる出血の意味を考察する。この出血は秋幸の死を象徴しており、秋幸は、その象徴的な死を経て再生した新たな秋幸として山から降りることになる。このように、『枯木灘』を秋幸の死と再生の物語と捉え、再生することで成長した秋幸が、真の主題に向かっていく姿を検証していく。

## 一、秋幸が〈反復〉を行う理由

『枯木灘』と『岬』の内容や物語の構造は近似している。この二つの作品の構造を見てみると、平穏な日常生活、そしてそれを壊す事件があり、終盤において異母きょうだいに対する秋幸の突発的な行動から成っていることがわかる。このように物語の構造が似通ってしまう理由は、中上が物語を書くにあたって、物語の祖の時代から物語にはプロローグからエピローグに向かって流れる法則や制度があると考えていたからである。[3] そのため、この物語の法則や制度というコードによって、『枯木灘』は『岬』の構造を〈反復〉したのである。つまり物語の構造の〈反復〉は、それが物語である以上、法則や制度によって免れることが出来ない必然だったのだ。

物語のコードは勿論のこと、既に論じられているように物語の内容においても、『枯木灘』の登場人物たちは他者（他の登場人物）の物語を踏襲し〈反復〉しているのである。[4] 以下、その具体的な分析に移る。物語中において龍造と郁男の行動や役回りを秋幸は〈反復〉している。まず、龍造の〈反復〉とは、龍造が囲っていると噂されている「藤田」の女と性的関係を持つことだ。この女を龍造が囲っていた事実はなかったが、秋幸が同時に複数の女と性的関係を持つことは、同時に三人の女を孕ませた龍造の〈反復〉となる。さらに紀子を妊娠させた秋幸が、秀雄を殺害し入獄することは、フサが秋幸を身籠っている最中に龍造が入獄したことの〈反復〉である。だが、より重要な〈反復〉は龍造ではなく郁男の〈反復〉だ。その一つは次の引用にあるように、郁男と秋幸が同じ役を振り当てられ、同じ気持ちを抱いていることであ

る。

その赤ん坊の美智子が大きな腹をして帰ってきたのだった。秋幸には、そっくりそのままかつて昔あったことを芝居のように演じなおしている気がした。いや、自分が、かつて十六年前の兄と同じ役を振り当てられている気がした。

これにはまず、実弘と駆け落ちをした美恵と、五郎と駆け落ちをした美智子の〈反復〉がある。美智子の叔父ではあるが兄のような立場の秋幸が、五郎と駆け落ちした美智子を見つめる役割を担わされたのは、駆け落ちをした美恵を見つめる兄・郁男を〈反復〉しているからである。一族の長として家を守り続けた郁男と、そうではない秋幸という差異が生じてはいるが、秋幸も郁男も生活の秩序を乱された点は同様である。なぜなら、美智子の婚約者である五郎が秋幸の異母弟・秀雄と諍いを起こしたため、秋幸は一定の距離を保っていた浜村家と接近しなくてはならなくなってしまったからだ。この結果、以下に引くように、秋幸は片親が違う弟を持つ兄の心情を理解し、そのため郁男の心情を理解できるようになったのである。

（秋幸は：引用者注）秀雄の兄ではあるが、秋幸は（浜村の家において認められた：引用者注）兄ではない。いや腹違いの兄だという気持ちは秀雄と町で出あう秋幸の心のどこかにあったはずだった。

秋幸は、郁男を想い出した。郁男は秋幸の種違いの兄だった。秋幸はそう思いつき、或る事に思い当り愕然とした。郁男は、今の秋幸と同じ気持ち、同じ状態だったのだ。

（…中略…）殺してやる。秋幸は思った。郁男はその時、そう思ったのだった。その時の郁男の眼は、今の秋幸だった。郁男は何度も何度も鉄斧や包丁を持って、路地の家から〝別荘〟の辺りにある義父の家へ、フサと秋幸を殺しにきた。

この場面の直前、秋幸は秀雄と龍造が一緒にいる場面に遭遇していた。そのため、始めて秀雄の「腹違いの兄」であると

いう認識が、秋幸の中で浮上してきたのであろう。秀雄の「腹違いの兄」という立場を自覚することによって、「腹違いの弟」である秀雄が親元で何不自由なく親に庇護されていることに改めて気づかされ、秋幸は自身を「種違いの兄」郁男と重ね合わせ、「種違いの弟」に親子の親和から排除された郁男の想いを理解できるようになったのである。秋幸が秀雄の、郁男が秋幸の、義理の兄という関係性も〈反復〉しているのだが、それ以上に二人の心情の〈反復〉が重要と考える。なぜなら、この義理の兄弟という関係を秋幸に再確認させる要因となった人物が、五郎と秀雄の諍いによって秋幸に急接近してきた龍造であるからだ。龍造は、郁男が一族の長として守っていた母と母の子から成る西村家を破壊した人物であった。仮に、龍造が西村家に闖入しなければ秋幸が生まれることはなく、従ってフサが繁蔵と再婚しなかった可能性もあるだろう。また、再婚したとしても父親が同じであるため、路地に残った郁男と美恵を連れ子とした可能性も否定できない。つまり、龍造の存在がなければ、郁男の平穏な暮らしは守られたのである。続いて秋幸について見てみると、秋幸は五郎と秀雄の諍いによって、浜村家との間に保っていた距離を壊された。さらに、この諍いのときの姉らの発言により、これまで意識していなかったであろう西村に属しきれていないという事実を、秋幸は突きつけられたのである。つまり、秋幸と郁男は龍造の出現により、平穏な生活を壊され、寄る辺なさという不安を抱くこととなったのだ。しかも、龍造との接近によって、秋幸は自身の入ることのできない龍造と龍造の子・秀雄との間の親子の親和が漲った空間を見せつけられたはずである。それは、秋幸とフサの間にあった親和の漲る空間に郁男が感じたに違いない、親に排除された疎外感と等しい。この、親和によって閉じられた空間から排除されることによって生じた不安が、郁男と秋幸の二人に、それぞれその空間にいる者への殺意を抱かせたのだ。この義理の弟に対する殺意と、その原因となった家の親和から疎外される二人の心情も〈反復〉しているのである。このように郁男と同じ境遇に立たされた秋幸は郁男の行為や心情の〈反復〉を無意識の裡に行ってきたと言える。

さて、〈反復〉の行為として多く論じられている秋幸の近親相姦であるが、これは〈反復〉ではないと考える。先行論では秋幸とさと子の近親相姦について、郁男と美恵を若夫婦

のようと言い、郁男が美恵に恋をしたという路地で流れた噂や、路地で歌い継がれる盆踊り歌の「きょうだい心中」の〈反復〉だと論じられている。[5]

確かに、さと子が秋幸の異母妹と判明し、秋幸が龍造に「さと子と姦った」と言う場面は、『枯木灘』の中にある。だが、さと子との性交そのものは「その新地の女は、秋幸のはじめての女だった。二十四のそれまで秋幸は女を知らなかった。それは姉の美恵が禁じた。」と叙述されるように、『岬』で行われている。『岬』において秋幸は、母と姉が強いた性交の禁止や龍造を実父と認めてはならないという禁忌を破ったことにより、新地の女を異母妹と認識できるようになり、その女を犯すことで近親相姦という禁忌までも破ったのである。つまり、この近親相姦は母や姉の呪縛から逃れ、秋幸の自己を確立するための行動だったのであり、作中で独自の意味を持つ。兄が妹に恋をし肉体関係を迫ったとする郁男と美恵の噂や、兄が妹に恋した故の悲劇を歌う盆踊り歌の「きょうだい心中」と、龍造やフサを凌辱するために行われた秋幸の近親相姦とでは性格が異なっているのだ。〈反復〉と一括りにしても、〈反復〉する者が〈反復〉される者の行動を全く同じようになぞる必要はないだろう。だが、この近親相姦は、恋情とは違う秋幸の明確な意思によって行われているため、郁男や「きょうだい心中」の〈反復〉とはならないのだ。

それを明確にするには、秋幸が行った郁男の〈反復〉が正確には何だったかを見ていかなければならない。〈反復〉行為は石原千秋によって「秋幸は、「反復」することによってしか秋幸たり得ない[6]」と論じられているが、秋幸が行った真の〈反復〉は、郁男の自殺に関係すると考える。なぜなら、フサが龍造と関係を持ち、龍造の子である秋幸が誕生し、その後、フサは秋幸のみを連れて繁蔵と再婚した。その上、妹らが結婚し、唯一人路地の家に残されたことにより、不幸を一人で背負わされたと感じたため郁男の自殺は起こった、と秋幸の中で謎は解けている。しかし一方で、秋幸は「その自殺がいくら解いても解いても新たに仕掛けられる謎」と考えている。これは、郁男を殺してしまったという想いから秋幸が逃れられないために郁男に捕らわれ続け、郁男の存在が強烈な葛藤となり、その結果、無意識の裡に郁男の〈反復〉を繰り返してしまうからである。また、菊田均は〈反復〉について、

反復というのは、つまるところ「私」の一個性、固有性といったものを否定したところに成り立つものである。「私」が成り立つためには、他の誰からも独立した独自の存在として自分を確定することが不可欠の前提となる。ところで秋幸が「あの男」や郁男の反復であるというとき、秋幸という本来ならば固有の「私」は、「あの男」や郁男によって浸透され、不断に相対化され続けているのである。秋幸はそれ自体独立した固有の「私」ではなく、「あの男」や郁男といった他人との直接的な関係の下に置かれている。[7]

と論じている。この指摘を援用すれば、秋幸は自身の固有性を否定し、郁男の影響下に自身を置いてしまっているのだと言えよう。つまり、郁男の〈反復〉行為を無意識の裡に行ってしまうことは、秋幸が不安定な自己しか持てていないことを示しているのである。

## 二、帰属する場所を持たない秋幸

前章で見たように、秋幸は郁男に呪縛され続け、不安定な自己しか持てていない。それと同時に、本来ならば自分の居場所として守ってくれるはずの家の中でも秋幸は不安定な立場に立たされている。系図を見ても明らかなように、三つの家に関わっているという点ではフサも同様である。だが、フサは彼女の他に同時に二人の女を孕ませていた事実を知った時点で龍造とは縁を切り、「いまの竹原と一緒になる時、二人共昔のことはすっぽりと水に流して、言わんと約束しとる」とも語っている。「浜村」という言葉を意識し続け、また郁男の自殺の謎に捕らわれ続ける秋幸とは違い、フサは三つの家に頓着していないと考えられるのだ。では、三つの家を意識せざるを得ない秋幸はどのように自身の位置を認識しているのだろうか。

自分には名前が三つある、と秋幸は昔思ったことがあった。実際にそうだった。秋幸はフサの私生児としてフサ

の亡夫の西村という籍に入り、中学を卒業する時に、義父の繁蔵が自分の子として認知するという形で竹原の籍に入った。（実の父である：引用者注）その男は浜村龍造と言った。

秋幸は秀雄に見つめられ、ふと自分が、三つの名前のちょうど真中に位置し、どういうことからも、どういう事件からも無傷のままここに至っているのに気づいた。

秋幸が三つの家の真中に位置するとは、同時にどの家でも中心に位置する資格を得ていないということである。秋幸は、それぞれ強い親和性によって閉じたこの三つの家のいずれにも所属できず、それらの発する斥力によって、それぞれに片足だけを突っこんでいるという、あたかも体半分引きちぎられるような想いを持つことで、これら三つの家の真中に宙づりにされているのだ。では、秋幸はそれぞれの家をどのように認識し、また彼らからどのように認識されているのだろうか。

まず、西村家では、フサと美恵の「減るんでなしに増えるんやもん」や、郁男の「死んだんと同じくらいまた生まれるんじゃ」という生まれることを肯定する考え方によって、一人だけ男親が異なっていても秋幸は家の中で守られていた。しかし、そのような西村の家の中心に位置する人物は、縊れ死んだ郁男である。郁男は秋幸の中で繰り返し想起され、さらに、美恵らによって死してもなお語り続けられている。郁男は死者でありながらも生者と同じ位置に存在しているわけだ。さらにフサの持ちかけに従って繁蔵の元で働くこともせず、一人西村の家を守り続けた郁男こそが西村の家の中心としてふさわしいのである。そのような折、五郎と秀雄の諍いが起こったことによって、秋幸は「兄が死んだ今、母の子として一等下に生まれたたった一人の男として秋幸が、母の子の一族の長としてふるまう」と、生きているからこそ一族の長になることが出来ると思うのである。だが、美智子が秋幸に向かって秀雄を「おまえの、弟」と呼ぶように、西村の長として振る舞えるという理解は秋幸だけのものであった。他の場面を見てみても、美恵が龍造のことを「声をひそめてそれが拭っても消えぬ忌しいことであるように「おまえが六月の腹の時まで一緒におったんやのに」」と話し、秋幸の生物

学的父親を否定することによって、意図せずとも浜村の血が流れる秋幸を西村の中で否定してしまうのである。だがしかし、そのような美恵も、先の美智子の言葉を「秋幸は違うんや」と否定する。秋幸と秀雄の関係を切り離しているわけだが、その一方で、秋幸の前で龍造の話題が出た際には「ここに秋幸おるよお」と、秋幸と龍造との関係を改めて表面化させている。一見、矛盾と見えるが、この二つの言葉の真意は、西村の人間として秋幸を守ることにあろう。つまり美恵は、龍造を筆頭に浜村家は否定したいが秋幸は守りたい、と秋幸に対して肯定と否定のアンビバレンツな認識を持っていると言える。次に、フサの秋幸に対する認識を見ておく。「フサが、父親を否定するのだ」と秋幸も思っているが、先に見た通りフサは龍造を否定している上、繁蔵と再婚する際に過去を水に流したことによって、勝一郎は勿論のこと龍造と暮らした事実をもなかったことにしてしまっている。そのようなつもりはフサになくとも、自分の存在を否定されたと秋幸が感じるのは自然であろう。これらから、秋幸は西村から肯定されながらも否定されていると考えられる。

続いて、竹原へ入った後の秋幸の西村や路地に対する態度を見てみると、

祖母はフサと離れて二人だけで暮らす郁男と美恵が心配だった。その時、フサが路地の家へ秋幸を連れてやって来た。涼台にフサと祖母が腰かけていた。美恵が祖母の持ってきたヨーカンを切って皿に入れ、涼台の二人にはいと渡した。小学四年ほどの秋幸は体はすでに中学生ほどあるのに、路地にもどってきても昔のように外に遊びに行こうとしなかった。生まれてからこの間まで育った家や路地が他所のように思えるらしかった。美恵はそれが嫌だった。

と、美恵の視点から秋幸が路地を他所のように思っていると描かれている。一見、秋幸は路地と西村を否定しているように捉えられる。だが、フサが繁蔵と所帯を持ったとき、秋幸は義理という垣根を取り払うため、傍若無人に、無頓着に振る舞い、そしてすぐに何の抵抗もなく繁蔵を「お父ちゃん」と呼んだ。その振る舞いと同様、これは竹原の中で生きていくための秋幸の知恵だったのである。

では、このように竹原の人間になろうと努力した秋幸は竹原の人間として認められたのであろうか。西村の中心が郁男であるように、竹原の中心となる人物も存在する。それは、竹原の家が貧困に苦しんでいた頃、自らを犠牲にして身を売り、家を守ったユキである。ユキは竹原の家の中で次のように位置付けられている。

ユキは竹原の長女だった。誰もがユキに一目おいた。ユキは竹原の一族そのものだった。自分の認める者だけが、食うものに困り暖を取るものに困った昔から成り上がった今、竹原の者として居るべきだ。

ユキはことあるごとに、竹原の家そのものになった気がするのだった。ユキは仁一郎が死んだ今、自分しか竹原の家を考え、竹原の一統の成功をいのる者はない、と考えている。

このように、ユキは竹原一族から自他共に竹原そのものと認識されているのである。そのようなユキは、戦後、龍造に家を焼かれているため、秋幸が龍造のように体の大きな男であり、龍造の面影があることから、

ユキから見れば、秋幸の体の大きさが竹原の家、竹原一族をおびやかすものとうつるらしかった。いや、それは秋幸の中に流れるあの男の血かもしれなかった。

と思うのである。竹原そのものであるユキが、こんな風に見ている以上、いくら努力しても秋幸が竹原の人間となることはあり得ないだろう。にも関わらず、秋幸は「繁蔵とは義理の父子なのに、繁蔵の顔を見ていると、本当の親子のような気がする。竹原という秋幸のみょう字が、生まれる前からついていた気がした。」（①）と思い、さらに「どうせおれも養子にでも行かん限り竹原じゃ」（②）と言っているように、自身は竹原の人間であると認識している。先に見た竹原の人間になろうとする努力を続けていると言ってもよい。だがその反面、ここに引いた①と②の間に

この家が嫌だ、秋幸は繁蔵の顔を見ながら思った。竹原

という姓が嫌だ、竹原というまやかしが嫌だ。秋幸は一度母のフサに、死んだらどこの墓に入るつもりか確かめたことがあった。兄の郁男の骨は西村勝一郎の墓にあった。「どこでもええ」とフサは言った。「もしおれが土方しとって事故起こって死んでも、竹原の墓だけは入らんど」秋幸は言った。

ともあり、竹原の人間であることを拒絶してもいる。つまり、秋幸は竹原の家に対する肯定と否定の間で揺れ続けているのである。

ここで、秋幸が家の空気をどのように感じていたかを見てみる。秋幸には、その「家の温い空気が疎ましく感じられ」ていた。つまり、秋幸にはそれが郁男を自死に追いやり、美恵を狂わせる原因と映っているにも関わらず、幸せに自足している家に漂う温もりが不快なのである。これに対し、西村の家の空気は「郁男が湿った空気のようにここにいる。死んだ者、生きた者が同居しているこの美恵の家がうっとうしく同時に秋幸を安堵させる」。これは、竹原の家から否定され続ける秋幸が、彼を否定しながらも肯定してくれ、母に捨てられて犠牲となった郁男の自死や美恵の精神の異常などの苦難を乗り越え、安泰な現在のみを生きているわけではない西村の家に、再び安住の地を求めたいという心理の現れである。だがそのような秋幸の想いがある一方で、郁男に捕らわれ続ける美恵は、言葉で示さなくとも、秋幸の後ろに郁男を重ねて見てしまう。より正確に言えば、「おれはまったくおれ一人だ」と考えている秋幸は、一人の自立した人間として西村に肯定されたいと願っていることになる。

最後に、浜村の家であるが、この家の中心は秋幸の実父である龍造ではなく、龍造の「熱病」が作り出した架空の祖先である浜村孫一である。秋幸は子供の頃から浜村とは無関係と思おうとしながらも、「浜村という言葉を耳にし眼にするたびに体がほてる気がし」たとあるように、どうしても意識の片隅から浜村龍造を追い払えずにいた。だが今では、

「わしの子じゃ」男はどなるように言った。「二人共わしの子じゃ」

その時、秋幸は随分昔からその言葉を聴きたいと待っていた気がした。あのアキユキと呼ばれた時からだった。

とあるように、むしろ自分の子であると龍造に認めてもらいたいと思うまで、秋幸の意識は変化しているのである。そして同時に、秋幸の龍造に対する肯定の感情も芽生えたのだ。だがやはり、

確かにおまえの子だ、おまえからこの胸も眼も歯も性器も半分ほどもらった。だが、その半分が嫌だ。

その男が、自分の半分を作ったことが秋幸には耐え難かった。もし男の言うようにその孫一の伝説が本当だとしても、男が有馬の土地に石碑を建て、血が永久に滅びることなくかつて何代も伝わったようにこれからも何代も続くように祈るのなら、秋幸はすすんで滅ぼしたい。(…中略…)「浜村孫一が聞いてあきれる、おまえのやる事は明日食う米を思案する貧乏人を痛めつける事と一緒じゃ」秋幸は言った。一切すべて否定したかった。

などとあるように、秋幸は自身に流れる龍造の血をどうしても受け入れられない感情も残しているのである。つまり、秋幸は浜村に認められたい思いと、浜村を拒絶したい感情の間で揺れ続けているのだ。

これらから、秋幸は三つの家に対し肯定と否定の感情の間で揺れ動き、どの家にも属しきれない不安定な存在だと言える。そして、不安定な存在であることは、秋幸が郁男のように自殺することも、美恵のように気がふれることもなければ、文昭のように骨折するまで怒られることもない、「無傷」な存在であることを同時に意味している。傷を負った三者は全て純粋な血の流れを持った人間、つまり、家から認められた人間であり、家の中では安定した位置にいられる存在である。それに対し、三つの家それぞれの強い親和の力によって、三つの家の間で宙づりになるしかない秋幸は不安定な存在なのだ。そのような秋幸が出した結論は、

竹原秋幸、その名が嫌だ。竹原フサ、その名が嫌だ。秋幸は背に広がった鳥肌と不快感が何故なのか分からないまま思った。浜村秋幸、その名も嫌だった。(…中略…)言ってみれば秋幸はその路地が孕み、路地が産んだ子供も同然のまま育った。秋幸に父親はなかった。秋幸はフ

サの私生児ではなく路地の私生児だった。私生児には父も母も、きょうだい一切はない、そう秋幸は思った。

秋幸は川原に立ち、男を見ながら、その路地に対する愛しさが、胸いっぱいに広がるのを知った。長い事、その気持ちに気づかなかった、と秋幸は思った。竹原でも、西村でもない、まして浜村秋幸ではない、路地の秋幸だった。

と、三つの家全てを否定することである。秋幸の一番身近にいるフサや美恵が龍造の子であることを認めない以上、自身の出自を受け入れられないからだ。そのため、自身を肯定してくれる場として誰をも受け入れる「路地」を見出し、「路地の私生児」や「路地の秋幸」となることを選んだのである。

## 三、秋幸の死と再生

「路地」という自らの出自を見出した秋幸は、ここに至るまでに持ち合わせなかった暴力性を開花させる。この変化は作品の冒頭から「大きなものが見ている気がした。形を現わさないものだった。いつか必ず形をあらわすと思った。」と予言されていた。「大きなもの」とは、「秋幸の半分が顔をあらわしはじめているのだった。いつかその半分ほどの暗闇は光にさらされ、二十六歳の秋幸という体の中に閉じこめられたものがあばかれる。」とあるように、龍造と対峙したことで明確に意識された秋幸の半分を流れる龍造の血であろう。かくて秋幸は、自身のダンプカーを囲むようにして停められたオートバイをダンプカーで踏み潰し、さらにそれらの持ち主を轢き殺そうとするほどの暴力性を現すのである。暴力性を開花させた秋幸は恋人・紀子から「ヌーッとしたにおい」がしなくなったと言われたように、行動だけではなく体臭までもが変化した。「ヌーッとしたにおい」の源こそ、秋幸が抑え殺していた暴力性であり、それを発現＝解放することで、その体臭が消えたのである。秋幸の変化は紀子との性行為の場面でも現れている。暴力性を開花させる前は、

「藤田」の女は乳首を噛め、噛み切ってくれと言った。

痣が出来るほど乳房を摑んでくれと言い、実際赤い痣が

太股の内側、乳房に出来た。秋幸は自分が本当に一頭の獣である気がした。獣となって凌辱した。だがこの女（紀子：引用者注）は違った。秋幸は自分のごつごつした体がいやで、紀子と寝るたびに紀子を苦しめていると思った。

とあるように、龍造の一部分を知るために彼が囲っていると噂されている「藤田」の女との行為では、女に言われるがまま激しく性交を行っているが、紀子との性交においては紀子の苦痛を慮っている。だが、暴力性を開花させた後には、

いつもモーテルや旅館で紀子は秋幸の性器が紀子の体の中に入ろうとする度に、足をいっぱいにひらき、腰を上げても、「痛い」と言った。その度に秋幸は、一時、その紀子の痛みが治まるのを待って、深くまた入れようとする。紀子の性器が秋幸の性器におし広げられ、それでも柔らかく優しく包んでいる。いつもそれが好きだった。乱暴すると壊れてしまう。だが今は違った。壊したかった。痛みを与えたかった。

と、秋幸は紀子に痛みを与え、壊したいと思い、乱暴な性交を行うようになる。それは「ケダモン」の正体が、異母妹と近親相姦を実行した、今、まさに目の前にいる秋幸自身だと紀子に証明したかったからだろう。さらに秋幸は、龍造が実際には行っていない近親相姦を行ったことで、龍造を超えたと考えているのではないだろうか。そして、龍造と対等の立場に立つ資格を得たはずだった秋幸は、ここで龍造から新たな試練を与えられる。龍造は「女というもんは、寝るだけのもんじゃ」と秋幸に言い放ち、たとえ「ケダモン」となったとしても、秋幸が龍造を超えるのはおろか対等の立場に立つことすらできないと見せつけるのである。これによって秋幸は、次にあるようにこれまで女に振り廻されていたことに気が付く。秋幸が、男のみで繋がる浜村孫一の物語を受け容れようと想い始めた証左であろう。

女は何故魅くのだろう。美恵は、郁男が死んだ時、泣いた。秋幸は家の掘りごたつの中に足をつっこみ朝飯を食いながら、路地の家の柿の木でくびれ死んだときいて、その時「ざまをみろ」と思った。郁男に勝ったと思った

のだった。美恵が狂い、さと子の事があった今、秋幸は、女である姉の美恵の力に振り廻されていた、と思った。

秋幸は持っていたスコップをいきなり型板にたたきつけた。型板は割れた。どなりつけてほしい。殴り倒してほしい。そう思った。そうすれば自分が、浜村龍造の子であり、浜村龍造と同じように熱病を患い、祖父があり、曾祖父があり、はるか先に浜村孫一がいるという架空の物語を信じ、秋幸の半分の謎が明らかにされる。何もかもから自由になる。

大事に手入れしてきたスコップや型板などの土方の道具を自ら乱暴に扱う行為は、これまで母たちの望むように振る舞ってきた大人しい秋幸という殻を破ることと同義である。それは、浜村家を意識し過ぎたがために暴力性を持つ浜村の血が漲り始めたことを認めるために、秋幸の中で起こった変化だと考えられる。さらに、人夫に殴り倒されることが自身に流れる浜村の暴力性を含んだ血を認められた証になるとすれば、浜村の家の親和に入ることができ「無傷」ではなくなるとも、秋幸は考えたのではないだろうか。浜村の家に入ってしまえば、宙づりの不安定な立場を強いてきた家を含め、秋幸は「何もかもから自由にな」れるのである。

なぜ、秋幸は浜村家を意識してしまうのか。その原因は、龍造について見聞きしても意識されなかった体内に詰まる湿った黒い体液の存在に、五郎と秀雄の諍いによって気付かされたことだと考えられる。この黒い湿った体液とは龍造から受け継いだものである。なぜなら、龍造が建てた浜村孫一の石碑を見て「石碑は男の濁った血が廻って出来たように黒かった」と感じているように、秋幸が龍造の血は「黒」いと認識しているからだ。この体内に徐々に詰まっていく黒い湿った体液を浄化する作業が土方である。秋幸にとって土方は、五郎と秀雄の諍いが起こるまでは、安定した日常の一場面として秋幸を風景の一部とし、安心をもたらす営為であった。だが、諍いによって龍造と接近しなくてはならなくなってからは、秋幸の体内に詰まった体液を浄化する作業へと変化していく。これは、秋幸が浜村孫一の石碑を見た後、海に入り、その一部になりながら体の中を浄めたいと思っていることからも言えよう。風景の一部となり土方をしている時、秋幸は自瀆している感覚を憶え、快楽を味わう。自瀆とは、快楽を

味わうだけでなく、同時に龍造から受け継いだ精液を体外に排出する行為でもある。だからこそ、秋幸は土方が出来ない時は紀子と性交を行うのである。

その紀子を中上が作中に描いた意図を見ていく。「紀子」という名前について考えていくと「紀子」が特別な名前であることがわかる。例えば、「紀」は中上が生涯意識し続けた「紀州」を顕し、また子供の命名や妻のペンネームを考えた際に使われた文字である。その上、他の中上作品において「紀」という字を当てられた登場人物はいないのだ。本稿ではさらに、「紀子」の「紀」はこれまで論じられてきた「紀州」の「紀」に加えて、『日本書紀』の「紀」も中上が念頭に置いていたと考える。中上は「紀子」に、『日本書紀』にのみ紀州にあると描かれる、イザナミの墓・花の窟を重ねているのだ。[8]「海から見ると女陰そのものに見えると言われた」花の窟という女陰に自らの男根を「入れ」ることによって、秋幸は土方をせずとも風景の一部になれるのである。秋幸にとって土方も紀子との性交も、風景の一部となれ精液を排出できるという意味で同様の役割を果たすのである。さらに、作中では花の窟と孫一の石碑は車で五分の距離にあると叙述され、中上が二つが密接した関係にあると捉えていたことがうかがわれる。浜村孫一の男根のような石碑と女陰としての花の窟、秋幸の男根と紀子の女陰の対の構造が成り立っていると言えよう。

また、龍造は孫一の石碑を建てた有馬の地を手に入れている。実は、龍造は孫一の血で繋がった者の〝共同体〟を創ろうとしていたのだ。こう考えると、紀子という神話の意味を込めた女性を秋幸の恋人として登場させた意図が一層際立つ。龍造は自らの領土である有馬の地で、孫一の国を創造＝国生みを果たそうとしているのである。そして、「孫一の眼に守られて在る」と思っている秋幸も、自身のルーツを浜村孫一と認め、龍造の国創りに賛同したのである。また、秋幸に繰り返し試練が与えられ、それを乗り越え成長すると、その成長に見合った試練が次々と与えられる〈秋幸サーガ〉全体の構造を見ると、こちらにも、神話における英雄譚と同じ構造を指摘できる。紀子という神話の意味を込めた名の女を登場させることで、「紀州」と神話世界が〈秋幸サーガ〉に組み込まれ、同様の神話構造が『枯木灘』の物語を作動させていることを中上は示したのである。

秋幸は、自分がその男、蠅の王浜村龍造の子であるなら、自分の遠つ祖もその浜村孫一であることに気づいた。それは天啓のようなものだった。男を嘆かせ苦しめるには、男の子である秋幸が、浜村孫一とは何の血のつながりもないと立証するか、敗走してこの熊野の里へ降りて来たという伝説を、作り話としてあばくことだ。いや、浜村孫一を男の手から秋幸が取り上げることだ。秋幸は想った。一切合財、おまえの言うことを認める。だが、おまえではなく、この俺こそが浜村孫一の直系であり、浜村孫一であり、浜村孫一の眼に守られて在る。

一読して明らかな通り、浜村家の親和の中に身を置いた秋幸は、龍造から孫一を奪おうと志す。龍造も秋幸も共に孫一の直系であるが、家という単位にこだわっている限り、浜村家の正式な家族ではない秋幸は、龍造の血の流れを持っていても浜村家の直系となることができない。その家という空間を秋幸に改めて意識させる場が精霊送りであった。それは、浜村だけではなく西村にも竹原にも当てはまる。

西村の家の精霊送りのみをすればよい姉たちがおり、秋幸と同じようにユキから竹原の人間と認められない徹でさえ、竹原の精霊送りを見ることを許されているのだが、龍造に呼ばれ浜村家の精霊送りの場に行った秋幸は、龍造たち浜村の家族の親和のありようを見せつけられる。この精霊送りは、三つの家の間に宙づりになっている不安定な存在であることを改めて秋幸に意識させる場だったのである。さらに、秀雄の「おまえ、おまえと親にむかって言いくさって」と言う言葉が、父親・龍造とその子供、そしてその子供の母親からなる家族の存在を改めて秋幸に気づかせ、秋幸に秀雄に対する殺意を芽生えさせた。浜村家の親和の漲った空間は、郁男にとってのフサ・秋幸・繁蔵・文昭から成る家に等しい。つまり、秋幸も郁男も親和の漲る空間から疎外された人物として、自らが疎外されていることを思い知らされた相手に殺意を抱いたのである。だが、秋幸は秀雄を殺すことが出来たのが、郁男は秋幸とフサを殺せなかった。秋幸には龍造から受け継いだ汚れた血が流れているのに対し、龍造の血が流れていない郁男は純粋で無垢であったからである。人を殺せる血を持っていなかった郁男は自ら命を絶つしかなく、秋幸は黒い湿った体液の宿命ゆえに殺人を実行できたのである。秋幸は秀雄

を殺害した後、山へと逃亡し、そこで脚を怪我する。この山への逃亡は龍造が遠つ祖としている浜村孫一が片眼片脚になりながら敗走した経緯を想起させる。この時、初め新宮から別の土地へ逃げようとした秋幸は、いてもたってもいられぬ思いにかられて、山へ駆け込んでいる。実は、秋幸は無意識の裡に孫一を〈反復〉していたわけだ。

次に秋幸が怪我をし、血を流す描写を見ていく。

> 秋幸は路地を思い出した。美恵が路地から離れられないように、秋幸もその路地から離れられない。だが、血は流れた。自分が一体何なのか、と思った。竹原秋幸でも、まして西村秋幸でもない。　（傍線は引用者）

秋幸は「路地」を思いながら血を流すのであるが、ここで不自然な「だが」という逆接の接続詞が使われていることに注目しなくてはならない。この表現は、一度自身を受け入れる場として「路地」を見出したことを錯覚として否定するためのものである。「路地」から離れることの出来ないはずだった「路地の秋幸」の血が流れ出て行く意味は、これまでの秋幸を形作ってきた血、この時までの秋幸という存在そのものの否定に他ならない。言わば、これまでの秋幸はここで消え去った。この場面では、これまでの秋幸の象徴的な死が描かれ、同時に自身のこれまでの拠り所も消滅し、一度は「自分が一体何なのか」と自身を見失う。ここでは、拠り所である「路地」だけでなく、龍造から受け継いだ浜村の血も否定され、さらに、竹原秋幸でも西村秋幸でもない、と全てが否定されるのだから無理もない。しかし、そのおかげで、秋幸は、三つの家の間に宙づりにされる不安から解放され、さらに、血のしがらみからも抜け出すことができたはずだ。そして一度空洞となった自身の中に孫一を迎え入れ、孫一として浜村家の血を背負い、山から下りることとなる。この時の秋幸は物語（＝神話）を経巡って一回り成長し、龍造に対峙できる男へと生まれ変わっていた。かくて『枯木灘』の試練が乗り越えられたのである。

## おわりに

自身がどの家の人間でもなく、「路地の秋幸」または「路

地の私生児」だと気がついた時、秋幸は自分の居るべき場は「路地」と思ったであろう。にも関わらず、秀雄殺しの後に秋幸は山へ逃げる。紀子と会えなくなった以上、秋幸は花の窟に象徴される自然の中、この局面では山でしか、不安から逃れ安心することができないからだ。さらに、潜在的な記憶としての戦に敗れ山中を敗走した孫一の姿も、無意識の裡に秋幸に山への逃亡を促していよう。逃亡の途中、秋幸は怪我をし血を流す。この血は、母系の血と龍造から受け継いだ汚れた血、そして「路地」の血であった。これら秋幸を形作っていた血の流出は、この時までの秋幸の象徴的な死を意味しているのだ。こうして一度死んだ秋幸は、浜村孫一となって生まれ変わり、三つの家の間に宙づりにされている不安からも解放された。この構造が意味するように、『枯木灘』は死と再生の物語（＝神話）だったのである。秋幸逮捕後、路地や町内では秋幸に関する噂が流れた。それは、秋幸を一回りも二回りも大きな存在と見立てた噂であった。すなわち、路地で噂されていた龍造の〈反復〉である。そんな秋幸は、龍造の幻影の中に龍造と共に路地を地上げしている姿となって現れる。それは、再生した秋幸が龍造と正面から対峙できる力を獲得していることを示唆し、その生まれ変わった秋幸が現実に龍造のもとへ赴いたとき、『地の果て　至上の時』の物語が始動するのである。

**註**

（1）市川真人「覇王からの／までの距離」（新装新版『枯木灘』、河出文庫、二〇一五年）　ここでは、従来、「秋幸三部作」と呼ばれてきた『岬』・『枯木灘』・『地の果て　至上の時』に『鳳仙花』を加え〈秋幸サーガ〉としているが、中本の一統のタイチの生涯を描いている『奇蹟』の「イクオ外伝」という章にアキユキ（秋幸）も登場するため『奇蹟』も〈秋幸サーガ〉に入れてよいと考える。

（2）拙稿「中上健次『岬』―秋幸が自己を確立するまで―」（「中京大学文学会論叢」、二〇一五年）

（3）中上は、小説における一定のコードや文体の存在を一九七六年に行った小川国夫との対談「暴力、ディオニソス、語り」（「文芸」、二月）で語り、同年二月十六日の「日本読書新聞」に掲載された「小説の新しさとは何か」でも触れている。さらに、その詳細を後年、「物語の系譜佐藤春夫」（「国文学解釈と教材の研究」、一九七九年二月）の中で、

　物語の骨法、ここでは、いまひとつ顕らかにされるべき法則、制度である。物語が、プロローグからエピローグに向かって流れる法則や制度がある事は、物語の祖の

時代から自明の事である。序、破、急。起、承、転、結。いかなる物語も、この法則や制度をまぬがれる事はあり得ない。現存するどんな法や制度下にいる人間より、書かれてある小説、私がこの三十二の齢まで幾つも書き創った小説の登場人物らは、物語の法や制度の恐怖政治の下にいる。

と述べている。

（4）秋幸の〈反復〉行動については既に指摘されている。それらの中でも渡部直己は「真近さについて」（『中上健次論』、河出書房新社、一九九六年）の中で、秋幸の〈反復〉行動を「おのれの〈いま・ここ〉を犯す「余計なもの」への反撥から、逆に郁男の「物語」を成就し、龍造の「物語」のひとつを無自覚に反復」していると論じている。また、四方田犬彦も「貴種の終焉」（『貴種と転生』、新潮社、一九九六年）において「父親の物語を唾棄しつつ、最終的にはそれを無自覚に反復してしまう」と論じており、両者とも龍造の行動の〈反復〉を重視している。長野秀樹は「「枯木灘」論」（「国文学解釈と教材の研究」、一九八八年八月）において、秋幸だけではなく秋幸の姪の美智子や秋幸の従弟となる洋一らも他者の行動を〈反復〉していると述べ、『枯木灘』を「他者の〈物語〉を反復する物語」と定義している。

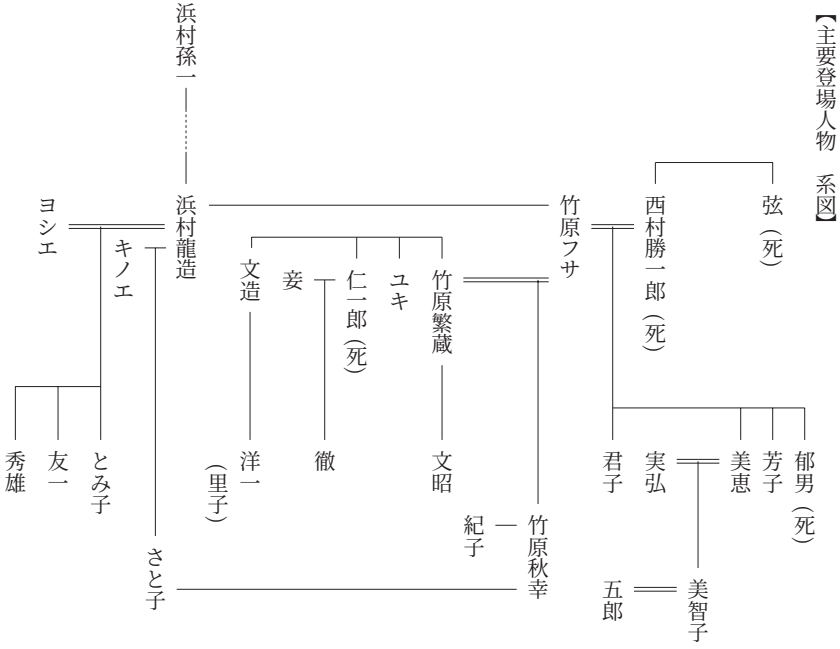
（5）日高昭二は「『枯木灘』から『地の果て至上の時』へ―「風景」と「資本」の物語」（「国文学解釈と教材の研究」、一九九一年一二月）の中で、秋幸とさと子の近親相姦を「兄・郁男と姉・美恵の無意識の相姦が重なっていた」と論じている。また、菊田均も「溶解する「私」―中上健次『枯木灘』」（「文芸」、一九八一年六月）において、この近親相姦が美恵と郁男の同居生活の〈反復〉であり、それだけでなく、路地に噂された郁男と美恵の関係自体が「きょうだい心中」の〈反復〉であると指摘している。

（6）石原千秋『枯木灘』（「国文学解釈と鑑賞」・別冊、一九九三年）

（7）前註5、菊田論文

（8）秋幸の恋人・紀子の名前の由来について、柴田勝二は「重層する現代と古代―『枯木灘』の時空」（「東京外国語大学論集」、二〇〇七年）において、紀子との肉体的な合一と土に対する土方の仕事が比喩的な連携をなしているとし、土との交わりによって秋幸が自己の居場所を得ることから、生まれ育った紀伊熊野の自然、風土を愛しつつ侵犯する行為を強調するために、秋幸が愛し犯す相手は、その土地を端的に象徴する「紀子」と名付けたと論じている。首肯できる意見だが、作中に「その昔火の神を産み、女陰が焼けて死んだという伊邪那美命を祭った花ノ窟」と繰り返し描かれている以上、それだけでは不充分であろう。イザナミが葬られている「花の窟」は中上にとって特別な場だったのであり、しかも、その場所が『古事記』では出雲国とされているのに対し、『日本書紀』では紀伊国とされている。中上が紀州の地は勿論、『日本書紀』を意識していたとする所以であり、「紀子」の

「紀」にも『日本書紀』の含意を読み込むべきだとする所以である。こうした神話を〈秋幸サーガ〉内に潜ませることによって、〈秋幸サーガ〉そのものが神話構造で展開されていることを示唆しようとする意図もあったろう。

（中京大学大学院文学研究科博士課程）

【主要登場人物　系図】